

---

# **プランジア人魔戦記**

長村

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブランジア人魔戦記

### 【ISBNコード】

N8617Z

### 【作者名】

長村

### 【あらすじ】

こことは異なる世界の、とある地方にあるブランジア王国。  
これは、人間と魔族の戦いの物語。

記憶喪失の少年、ショーマはあらゆる魔法を瞬時に覚えてしまう『能力』持っていた。望まない力を正しく制御出来るようにと望んだ彼は騎士士官学校において魔法を学ぶこととなつた。

そこで出会い、誇り高き少女メリル。勇気ある少年レウス。そして、多くの仲間達。

彼らとの出会いによつ、ショーマの心に目覚める想いがあつた。  
出会い、夢を語り、ともに戦い、別れ、そしてまた出会い。  
その果てに、何を見るといつのか 。

## 始まりの1日（1）

鳳凰歴306年。30年に渡る西と東に亘るブランジア王国とイーグリス王国の長い戦いは、イーグリス王国王都ロドースへの奇襲作戦の成功により、ブランジア王国の勝利に終わった。

それから3年。復興の続くブランジア王国ではある問題が発生していた。戦争末期より急増し始めた『魔族』の脅威である。精銳揃いとはいえ、長い戦で消耗し、治安維持活動にも戦力を割いていた騎士団ではこれに対応しきれずにいた。

そこで、300年以上の歴史上において、多くの騎士を輩出した了名門リヨール士官学校を一般にも開放し、若い力を広く育てることで、急ぎ騎士団の戦力を増加させることとなつた……。

人魔戦争と呼ばれる新たな戦いの前哨である。

ショーマ・ウォーズカは記憶喪失であつた。

黒い髪に、見慣れぬ格好、高級そうな眼鏡をしたその不思議な少年は、山の中で倒れていたところを老人オードランに助けられ、少しづつでも自分の記憶を取り戻そうと、彼とその妻の三人で静かに暮らしていた。

しかし彼には、とても静かには暮らせないであろう能力があつた。

魔法の『瞬間修得』である。

魔導師を志す者が最初に覚えるのに相応しいとされる初級魔法、『アイスショット』ですら、修得に2週間はかかるのが普通であるところを、彼は教本を一読しただけで修めたという。

初級魔法を容易く修得する……。それは才能ある者にはままある

ことではあつたが、彼の能力はそうではない。高位魔法の『サンダーストーム』も同様に一読で修得したというのだ。2度ならば偶然で済ませたところであつたが、後の検証により彼はさらにつき3度、計5つの魔法を同じように瞬時に修得したという。

記憶を失う前の彼は大魔導師であり、『修得した』のではなく『思い出した』のか。とも予想されたが、彼はまだ20にも満たない若者である。それは無いだろう。やはり、本当に彼だけの『特異さ』なのか。判断の難しいところであった。

いずれにせよ『経験の伴わない力』は彼自身をも危険にさらしかねない。そう判断したオードランは、ショーマ・ウォーズカの正体を保留とし、彼を正しく魔法の修練ができる騎士学舎へと預けることを決めたのだった。

「とは言つけどね……」

当のショーマは正直途方に暮れていた。

穏やかに日常生活を送る程度には問題の無かつたショーマの記憶喪失ではあつたが、都会に出て集団生活を送るともなれば、さすがに面倒も多いに決まつていてるだろつ。

まずは記憶を取り戻してから、と行きたいのだが、恩人であるオードランのお爺さんの言つことも否定しにくい。自分の記憶を取り戻すことは確かに大事だが、他人に迷惑をかける危険性を孕んだままいることが良いことなわけが無いのだ。

急いで事を使損じる。何もわからないなら、まずは今ある自分を固めてからだ。

オードランのお爺さんの経験則らしい。

「うん、そうだな。……頑張ろつ」

厳かな石造りの門。リヨール士官学校を前にしてショーマは一人、決意を固めていると、

「ああ、頑張りつー」

「うわっ」

いつの間にか隣に立っていた同世代くらいの少年に同意された。緩やかに波打つ金髪と、育ちの良さを感じさせる柔らかな笑みが印象的な少年だった。もちろん、今の記憶には無い人物である。

「ええっと……」

たじろいでいるど、金髪の少年は自分から語り始めた。

「僕はレウス。レウス・ブロウブ。君がショーマ・ウォーズカ君だよね。兄から話は聞いてるよ」

レウスと名乗った少年は気さくそうに微笑んだ。

ショーマもブロウブという姓には覚えがあった。オードランと暮らしていた小さな山村であるリウルの村から、ショーマをこの学術都市リヨールまで連れてきてくれた上、士官学校の入学や生活する寮の手配までしてくれた人物だ。手際良く物事を進めていく様子は、少し見るだけでも彼の優秀さを感じさせた。

なんでも騎士として歴史のある結構な名門の家系だとか。

「あ、ああ。その節は本当にどうもありがとうございました。こっちも色々と大変です。本当、助かったよ」

「どういたしまして。……申し訳無いが、兄はあれで結構忙しい人なんだ。だから学校では、代わりに僕が君の助けになろうと思う。ちょうど同じ時期に入学する事が決まっていたし。構わないかな?」

裏の無い笑顔にショーマは安心感を覚える。今の彼にとって、当てにして良い人物がいるというのは、それだけで随分と心を落ち着かせてくれるものだった。

「ああ。ありがたい話だよ。迷惑をかけると思つたび、びつぞよろしく頼む」

そつと手を差し出すショーマ。レウス氣の良い笑顔ではそれをぎゅっと握り返した。

入学式は式と云うほど大袈裟なものではなく、学長による挨拶程度で終わってしまった。そんなことに時間を割くなら、生徒達は1秒でも多く教練に励めということである。

「……その髪はこの国生まれでは無いよね。やつぱり外国から何かの用事でやつて來たけれど、不幸な事故が何かで……。つてところかなあ。やつぱり」

ショーマ達新入生は最初の授業が始まるまで教室で待機中である。退屈をもて余す学生達は、新しい友人達と交流を深めるため談笑中だ。

そんな中ショーマは、人の少ない一番端の席について、レウスと自身のことについて相談していた。

「でも隣国のイーグリスにもそんな髪の人はいないし、もつと遠くからかな？」

ここブランジア王国や東に隣接するイーグリス王国の人は金髪や茶髪がほぼ全てである。ショーマのような黒髪はまずいない。よつてレウスは彼をイーグリスより、さらに東方からの出身ではないかと予想した。ブランジアの西はかなり広い海しか無いので、海を越えてきたという可能性は低い。ゼロでは無いが。

「でも敗戦の影響でまだまだ治安の安定しないイーグリスの国境を一人で越えられるとは思えない。もしそうなら仲間がいるんだろうけど、搜してくれている様子も無い。君のような目立つ人を捜しているなら噂も聞くはずだがそれも無い。その眼鏡はそこそこ高級な物のように見えるし、それなりの身分であるならなおさらだ。」

この国の地理に関する記憶も無いショーマにとつて、次々と情報を挙げてくれるレウスは心強い。出てくる結果は空しいものばかりだったが。

「うん。……本当、何なんだろうね。俺は」

真剣に考えてくれているレウスに、ショーマは嬉しさと共に申し訳無さも感じてしまう。

「あまり急がなくても良いよ。今はまず魔法の勉強からしてみたいしさ」

「そうか、うん。わかつた。そつ簡単に結論は出ないか」

話が一区切りしたので、2人は軽く教室の様子を見渡す。

120名の新入生は3つの教室に分けられ、今は40名の生徒達がこの教室に詰め寄っている。

「本来は貴族や騎士の家系か、その推薦を受けた人しか入学できなかつたんだけどね。魔物の増大に対しても考へは改められたみたいだよ。平民からもたくさん志願者がいて、例年に比べると倍以上的新入生らしい」

「へえ……」

と、言われても貴族や騎士、平民の違いなどショーマにはよくわからない。「これがどれくらい多いのかというのもピンとこなかつた。でもやっぱり名のある騎士の生まれも多いみたいだね」

「……俺にはわかんないよ」

「はは、そうだね。例えば、あそこにいるのはガランマ家の次男だし、あっちで人だからが出来てているのはララニー家の三男。それから、目の前の席にいるのがドラニクス家のご令嬢。だよね？」

話の流れとはいえ、突然前の席にいた金髪の少女に身を乗り出して話しかけるレウスにショーマは少し驚く。氣をくだとは思つてたが。

声をかけられた少女はゆっくりとこちらに振り向いた。

「……こんにちわ」

美しく気品のある金髪と、宝石のようにきらめく碧眼、決め細やかな肌とで整つた顔立ちの、いかにもな美少女であったが、笑顔のレウスとは対称的な、機嫌の悪そうな仏頂面がそれを減じていた。

「……なにか嫌なことでもあったのかな」

「貴方に話しかけられたせいしからね」

「ひどいなあ」

2人は軽口を交わしあつ。どうやら顔見知りであるらしい。ショーマが置いてきぼりにされた気分でいると、レウスはすぐに彼女を紹介してくれた。

「ああ、こちらメリル・ドラークス嬢。彼女の家と僕のブロウブ家は昔から家族ぐるみで付き合いがあつてね。なんだか僕は彼女に嫌われているようだけども」

確かに愛想が良いと言えば良いのだが、裏を返せば馴れ馴れしいとも言える。それがレウスといつ少年だった。ショーマにはそれがありがたいのだが。

「メリル、彼はショーマ・ウォーズカ君。僕の友人だ」

「あ、どうも。よろしく」

どんどん話を進めてしまうレウスに困惑いつつも、ショーマはメリルに頭を下げる。

「……こちらこそ、よろしく」

メリルは短いながらも確かに笑みを返した。明らかに態度が違う対応だが、レウスは特に気にしていないようだった。

ざわつく教室の扉を開き、恰幅の良い初老の男性が入ってくる。手にはいくつかの資料を持つていて、彼が指導教員のようだ。

「はい静かに。……えーどうも。指導教員のボンボーラです。少々遅刻してしまいましたが、数分程度。まあ気にせずいきましょう」

1秒でも多く教練に励めと言われた覚えがあつたが、ショーマは気にしないでおいた。

「えー早速。諸君らの今後ですが。えー学生諸君はまず目標とする『クラス』を決めてもらいまして、それを目指して、各授業を選択して参加し能力を身に付けていき、最後には是非とも立派な騎士に

なって頂きます」

『クラス』というのは騎士達に『えられる戦闘スタイルに基づいた称号だ。それくらいはショーマも事前に勉強している。

「えーまず、授業には実技講習と筆記講習があり、実技は選択式ですが、筆記は必修ですので、サボつたり遅刻など無いよう。こちらでは騎士としての心構えや教養、戦闘行動に際しての戦術や戦略など『クラス』に依らない内容を学びます。

えーそれで肝心なのは実技講習についてです。武術系4科目、魔法系4科目の計8科目から自由に選択して、戦闘訓練を受けでもらいます。

武術系4科目の内訳は『剣術』、『槍術』、『拳術』、『弓術』。魔法系4科目の内訳は『黒魔法』、『白魔法』、『竜操術』、『薬師術』となります。えー内容はだいたい説明するまでも無いでしょうが……」

説明するまでも無いと言われても困る人物は1人いた。

「なあ、武術系4つと白黒魔法はわかるけど竜操術と薬師術って？」

ショーマは小声で隣席のレウスに尋ねる。

武術系は剣、槍、拳、弓。それらを扱う武術を学ぶ、というのはすぐわかる。白魔法と黒魔法もわかる。それを容易く修得してしまつたから彼はここにいるのだから。

しかし竜操術と薬師術は、知らないか覚えていない。字面通りの意味で良いのだろうか。竜を操る？

「竜操術は端的に言えば特殊な魔法技術だね。基本は同じだけど竜族の力を借りてさらに高位の魔法が使えるんだけど、結構難しくてあまり使う人もいないから、僕も詳しくはわからないよ。メリルが詳しいから後で聞いてみると良い」

前の席に座るメリルに目を向ける。彼女はそ知らぬ振りでじっとボンボーラ教員の話に耳を傾けている。

（難しい高位魔法ね……。結構すごい子だったのか）

「薬師術は薬草の調合を行う『クラス』だけ普通の薬剤師とは違

い、魔法の力を織り混ぜるんだ。普通の魔法と違つて薬の力にも頼るから準備に手間がかかるけど、そのぶん利便性に優れる技術だね。魔法の心得はあるけど、それだけで戦うには心許ない人向けかな」「なるほど。ありがとうございます」

ボンボーラ教員の話に意識を戻す。

「えーどれか1科目を全て修めることで卒業が可能となります、実際騎士の称号を得ようとするならば、えー1科目だけでは難しいところですので、別にもう1科目の半分だけでも修める事を薦めます。理想は2科目ですが、……えー少々覚悟がいると思われますね。それ以上は体を壊しかねないのでお薦めはしません。若者は無鉄砲が取り柄と言いますが、無理はしないよ」

3科目は相当きつい、と。2科目でもちよつと大変だそうだが、自分の能力を活かせば白魔法と黒魔法での2科目なら比較的簡単かもしれない。それで満足しておこう。そもそも騎士になりに来たわけではないのだし。

とショーマが思つていると、学生達の中から1人が声をあげた。

「先生！ しかしいずれ將軍クラスまで目指すのであれば、3科目以上は目指すべきだと思いますが！」

濃い色の肌をした、気の強そうな男子生徒だった。挑むような目付きでボンボーラ教員を睨み付けていた。

「……無理はしないようにと言いました。志を高く持つのは良いですが、ここでの教練だけが君の騎士としての全てになるわけでは無いのですよ」

「それでも早いに越した事は無いでしょう！」

……これは食い下がらない。そう素早く判断したのかボンボーラ教員の方が先に折れた。

「出来ると思うのなら、精々頑張りなさい。

……えー、それでは、授業の選択は自由ですがおおよその参加人数は把握しておく必要があるので、こちらの用紙に名前と希望科目を書いて本日中に提出してください。期限は短いですが戦場でのん

びり悩んでいる暇は無いとも思つて、やくつと決めてください。  
えーそれでは本日は解散とします。……。この後は興味のある科目の  
様子を見学する時間に当つてください」

ボンボーラ教員が退室すると、教室はまたにわかにやわつき始めた。

「さつきの彼、すうい剣幕だつたな」

「うん？ ああ、そうだね。まあそういう人もいるよ。將軍クラス  
ともなれば地位も名譽も得られる富も相当なものだからね」

「地位に名譽ね……」

「それよりショーマ、君はどの科目を受けるんだい？ やはり白魔  
法と黒魔法かな」

何か話をそらされた気がするが……気のせいだらうと判断した。

「ああ。ひとまずはね。レウスは？」

「僕はその二つと剣術かな」

レウスはしれっと3つの科目を挙げた。

「……大変なんだろ？ あ、まさか」

「気にしないで良いよ。ちゃんと入学する前からその3つを選ぶつ  
もりだつたからね。

……名門ブロウブ家の一員である以上、末の弟とはこゝえそれは当然  
のように望まれることだし、成し遂げる覚悟もあるよ」

それは先程の男子生徒とはまた違う強い意思を感じさせる物言い  
だつた。

「……かつこいいなあお前

「そうかい？ 照れるな」

そう言ってレウスは本当に照れ臭そうに笑つた。

正直な男である。

「あ、メリルはどうするんだい？ 龍操術以外にも受けれるの？」

照れ隠しか、レウスは前の席にいるメリルにも話を振った。

「…………はあ」

「どうしたの？」

「私も黒、受けけるのよ」

ため息をつきながらメリルは答えた。

「へえ。それじゃあ3人一緒にね」

「そーね」

嬉しそうなレウスと、そして対称的にダウナーなメリルであった。ひょっとしてこれが定番の調子になるのだろうか。そんなことをシヨーマは思った。

## 始まりの1日（2）

レウス・ブロウブは騎士の名門、ブロウブ家の三男として生を受けた。騎士と、騎士を志す者からは、その名だけで期待と信頼と羨望が集まることを宿命付けられたレウスは、しかし真っ直ぐな心を持ちながら育ち、他者の助けとなれるよう自らを鍛えることを惜しまなかつた。

そんな彼はやがて、人魔戦争においてその名を広く知られることとなる。

ショーマ、レウス、メリルの3人は揃つて8つの科目を順番に見学して回ることにした。

自分の受ける予定の無い科目も見ておいた方が良い、といつのはレウスの談である。

ざつと見てきたところ、武術系4科目は体力向上のための基礎鍛練や、各武具を用いた技能訓練など、傍目にも分かりやすいものだつたので軽く済ませて終えた。

現在は由魔法科の行われる教室に向かつていふところである。

「あ、そうだメリルさん」

「なに？」

「突然こんなこと言つのもなんだけど、俺、実は記憶喪失なんだ」

「本当に突然ね」

「悪いね。そのせいで……その、非常識なことをしたり、時々変なことを言つかもしれないけど、そういうこと承知しておいてほしい」というと言つてはみたが、ショーマとしては、実は少々勇気のいる告白だった。

「まあ、色々込み入つた事情がありそなのは察していたけど……」

メリルの視線はショーマの黒い髪に向かっていた。この国では見ないであろうそれは、彼女にとつても気になるところであった。馴染みの無い風貌に聞き覚えの無い家名。レウスが目をかけていたのもただのお人好しでは無いと察してはいた。

「記憶喪失ね……。どんなことが思い出せないの？」

「名前は思い出せたけど、1ヶ月ほど前、リウルの村で目が覚めた時より以前の記憶がわざぱりとね」

「さつぱり？」

「うん。どこで誰とどんな暮らしをしていたのか。全然だめだ」

「それはまた……重症ね」

「あとはまあ、日常生活はわりと問題無いんだけど、魔法とかは……」

「わフ……」

「これから魔法科の見学だけど、変なことしたり、言つたりするかもしれないけど、驚かないでおくれよ」

「うん。それは良いけど……。ていうか記憶喪失のまま騎士志望なの？」 貴方

「ああ、いやそれはそれでまた色々あって」

「もう着いやつたよ、ショーマ」

結局話の終わらない内に白魔法科の教室に到着してしまった。

「ああ、えつと続きは、後で」

我ながら簡単に説明できない事情を抱えているものだと、ショーマは改めてそう実感した。

白魔法科の教室に入ると、担当教員と思われる女性から声をかけられた。

「あら、貴方、ひょつとして例の……？」

女性教員はショーマの黒髪を見て判断したらしく、学校へは彼の

能力はすでに連絡が行っているのだ。

「はい。彼がショーマ・ウォーズ力です。もつ話は聞いて頂けますか」

「ええ、はい……、あ、では貴方がブロウブ家の？」

「はい。レウスです。よろしくお願ひします」

「わかりました。あ、私白魔法科教員のエルメーラと言います。」

「皆さんもう他の魔法科には行きました？」

「いえ、3人ともここが最初です」

てきぱきとエルメーラ教員との会話を進めるレウス。その後ろではメリルが何やら言いたげな視線をショーマへと向けていた。

特別な事情……一般生徒には特に縁の無さそうな。そういうものを先程の会話から推測させられただろ？

「ではこちらに。魔法科ではまず最初に魔導力の測定を行いますので……」

「…………」

ショーマとメリルは無言のままエルメーラ教員の後へ続いた。

3人の前に置かれたのは無色透明な水晶玉だった。

「この水晶に手を置くと、魔導力の属性と強さが現れます。あんまりに反応が微弱だと、魔法科を受けるのはお薦めできないかなってなっちゃうんですけどね」

エルメーラ教員が説明する。ショーマには魔導力といふ言葉に覚えが無かつたが、字面から予想くらいはついた。

「まあそんな心配は滅多に無いでしょうけど。……どなたからやります？」

「じゃあ僕から」

特に相談もなくレウスが一番手を宣言し、水晶に手を乗せた。

すると、無色透明なはずの水晶の中に、どこからともなく黄緑色の煙のようなものが漂い始めた。煙は水晶の中をふわふわと漂つて

いる。

これが魔導力の属性と強さとどうやってありますか。ショーマにはこれがどうこう結果なのかも、どうこう仕組みでこうなるのかもさっぱりわからなかつた。

「はい、もう良いですよー。次の方は?」

エルメーラ教員は結果をメモしながら次の人物を催促した。

「ショーマ、やってみなよ」

「え、俺?」

「手を置くだけだよ。難しことは無いだろ?」

「あ、ああ……」

レウスが水晶から手を離すと、黄緑色の煙も消えた。それを見てショーマもそつと水晶に手を乗せる。現れたのは黒い煙だつた。

「うわ」

特に何か力を込めたわけでもなく、本当に手を置いただけで煙が現れた。

しかしビリカおどりおどりこხを感じる真っ黒な煙には、少し背筋が寒くなる。

「おお」

「あ、すごいですねえ。全属性ですか」

レウスと女性教員は揃つて感心してこうだつた。

「全属性?」

「あ、勢いもすげーですねえ」

「え」

黒い煙はレウスの黄緑色の煙と違い、強めの勢いで水晶の中をぐるぐると漂つている。

何が何やらわからないでいると、レウスが解説を始めた。

「これは色が属性、煙の漂う勢いが強さを表しているんだ。全ての色が混ざっている黒はつまり全ての属性を表す。勢いも強いし魔導力の強さも相当な物のようだね」

「要するに……？」

「君にはすごい魔法の素質があるってことね」

今更と言えば今更な事実ではあった。

瞬時に魔法を修得する能力。それはもちろん覚えた魔法を行使出来るということでもある。実際に強大な魔法を放つてしまったこともある。

……これが魔法の素質がある、と言わなければ何だと言つのか。だから別段驚くことではない。シヨーマ自身と、その事情を知る者にとつては。

「ふーん…………」

「そうで無い者が一人。メリルだつた。

「ずいぶんとまあ……すごいものを持つてゐるのね」

その言葉を驚きと苛立ちの混ざつた呟うな物言いだと、シヨーマは感じた。

「ああ、まあ、ね……。自分でも何でこんなことになつてゐるかわからぬし。それと……」

「まだ何かあるの?」「……」

「さつきの話の続きでもあるんだけど……」

「にわかには信じがたいわね…………」

シヨーマは自分の持つ『瞬間修得能力』のことについて、改めて話した。その能力ゆえ、この士官学校への推薦状が得られたことで。 「学校側でも、彼に関する色々と配慮するよつて言われてゐるんです」

エルメーラ教員が補足した。

「魔法を教える分には楽で良いんじゃないか。なんて冗談めかして  
る先生もいるんですけどね。フフ」

エルメーラ教員は呑氣そうに笑つた。

「……でも、良い印象を持たない人もいるんじゃないから。特に  
同じ学生なんかは」

しかしメリルはそれほど樂觀的では無かつた。

「ああ……」

言われてみれば、そういうことは、確かにあるかもしない。自分のことばかりで手一杯だったショーマは、そういう考えには至つていなかつた。

「記憶喪失はともかく、この事はあまりおおつぱらにしないほうが良いかもね」

「……そんなに隠し通せるものでも無さそうだけだ」

「その時はまあ、その時だよ」

「あ、私もそう思いますよ。学校外の人にも、あまり言いふらさない方が良いと思います」

「……そり、ですね」

ショーマが初めて魔法を修得してしまつたとき、それがどうこう物だつたのかもわからず、その魔法、『サンダーストーム』を不意に発動してしまつたことがあつた。

オーデランの育てている畑の半分ほどを吹き飛ばしてしまい、随分と迷惑をかけてしまつた。彼は笑つて許してくれたが、ショーマは自分が恐ろしくなつた。もしこれが人の多い場所であつたら……。そんな折、ちゃんとした学習のできる士官学校への推薦は、不安もあつたが安堵もあつた。希望があつた。

けれど今、それを疎ましく思う者もいるかも知れない。といつことに気が付いた。……それは少し、悲しいことに思えた。

「まあ、良いわ。そろそろ私と変わつてもうらえる?」

「え?」

「ほんやりしていたショーマは、メリルが何の事を言つてこるのか、一瞬わからなかつた。

「水晶」

「あ、そつか。『ごめん』

「ずっと水晶に手を乗せたまま話を続けていた」とにも気づいていなかつたようだ。

「まったく」

ショーマが手を離すと、すぐにもメリルは水晶に手を乗せた。さつさと済ませようとばかりに。

メリルの手は細くしなやかで、丁寧に磨かれた爪などさりげないところからも気品のようなものが感じられた。

(綺麗な指だな)

彼女の魔導反応は綺麗な紫色の煙で、勢いはショーマのそれより少しゆつくじめ。といった所だった。それでも結構な勢いがあるようだ。

「赤と青の綺麗な2属性ですね。強さもかなりある」

「彼に比べたらどうしたこと無いですよ」

「いやいや、新入生でこれは相当すごいですよ」

エルメーラ教員は素直に感嘆しているようだつた。

「彼女はドリニクス家の生まれなんです」

「ああ、そうだったんですね。いやさすがです」

メリルは横からのレウスの評価に澄まし顔であつたが、よく見ると笑みを押さえようとしているようにも見える。

「はい、それではこちらが結果の控えです。別の魔法科目を見に行くときはこれを見てくださいね。もう1回検査しなくても済みますので」

「ありがとうございます」

3人は先程の結果が書かれた紙を受け取ると、次は教室の様子を見学し始めた。

「この教室では魔法の術式や実戦における使用ノウハウなんかを学ぶんです。実際に発動する訓練は別の場所で行われる事が多いですね」

教室といつてもボンボーラ教員の話を聞いたあの教室とは趣が異なり、特に目立つのは大量の本と本棚である。

「あ、その辺にあるのは魔法の教本ですから……ウォーズカ君は読んだだけで覚えちゃうんですよ……。あんまり迂闊には開かない方が良いと思います……」

「あ、そ、そうですね。気付けてます……」

「ちゃんとした授業は明日からですので。今日はこの辺で」「ありがとうございました」

見学を済ませ、教室から退室しようとする。

「あ、ショーマ、彼だよ」

レウスがさきほどの水晶玉で魔導力の測定をしている生徒に気が付いた。

「ああ……」

ボンボーラ教員に囁みついていた濃い肌の色をした男子生徒だった。何やら悲い顔をしている。

「おーい」

レウスはさつそく近づいて声をかける。

「…………はあ」

またが、とため息をつきながらメリルは彼の様子をただけで追う。「君もこれから魔法科の見学かい？ 良かつたら一緒にどうかな。同じ教室に集まつたよしみで」

レウスは気さくに話しかけている。ショーマとメリルはそれを少

し離れた場所から見てているだけだ。

「いつも……あんな調子なの？」

「……そつみたいね」

「僕はレウス・ブロウブ。君は？」  
「ブロウブ……？」

男子生徒はその名に思つところがあるのか、少し考えた後、「デュラン、だ」

家名までは名乗らなかつた。

しかしレウスは氣にすることなく笑顔で手を差し出した。

「デュランか。よろしく！」

デュランは水晶に乗せていた手を下ろし、ゆっくりと握手をかわした。

「白魔法ってことは、君はやはり……『聖騎士』を？」

「ふん……。見ただろう？　今の反応。微かに真っ白な煙が見えただけ。魔法の才能はからつきしつてこそさ。せんなんで『聖騎士』なんて……」

「鍛えれば伸びるものだよ。そつ簡単に諦めない方が良いと思つな」「どうだか……」

デュランは寂しそうに笑うと、そつとレウスの手を離した。

「俺は一人で回るよ」

「そうかい？　……お互に頑張ろうね。それじゃ」

「ああ」

デュランと別れたレウスが、シヨーマとメリルのもとに戻つてくる。

「駄目だったか」

「うん。……でも想像してたより良い人そうだったよ」

「ふうん」

レウスは彼を気に入つたようだつた。少し話しただけだろうに、元

そうわかるものなのだろうか。ショーマにはイマイチ疑問だった。

「まあいいわ。早く次、行きましょうよ」

こうしてちょっとした出会いを経て、3人は次の教室へ向かうの

だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8617z/>

---

プランジア人魔戦記

2011年12月27日01時52分発行